

京都帝國大學法學科大學

經濟論叢

第二卷 第二號

論說

●戸數割及戸別割ヲ論ズ 法學博士 神戸 正雄
●戰後ノ米國ニ於ケル歐洲移民運動ト日本移民問題(一) 講師 米田庄太郎
助教授 山本美越乃

研究

●民族的自覺ト植民地土民ノ教育 法學博士 戸田 海市
●不換紙幣ノ價格ニ就テ 法學士 三木 純吉
●大藏省證券ノ割引歩合ニ就テ 法學士 小島昌太郎
●保險學說ノ發展(二)定

雜錄

●中田公直氏遺著「佐藤信淵ノ農政學說」 同志社大學教授 瀧本 誠一
●米ノ生産費ニ就テ 助教授 河田 嗣郎
●商業道德ト時勢ノ變 法學博士 神戶 正雄
●家庭ニ關スル新統計調査例 教授 財部 靜治
●中歐經濟同盟說ニ就テ 法學博士 小川 郷太郎
●幼兒死亡ト貧困 法學博士 小川 郷太郎
●米國ニ於ケル各國移民ノ消長 助教授 山本美越乃
●小國ノ將來 講師 高田 保馬
●紹介——祖國ヲ顧ミテ(河上博士著)孤立國(谷井法學士譯) 蘇峰文選(徳富猪一郎著)

中田公直氏遺著「佐藤信淵」

農政學說

同志社大學教授 瀧 本 誠 一

故中田公直氏遺ノ著ニ係ル「佐藤信淵ノ農政學說」ハ法學博士高岡熊雄氏編纂「經濟學農政學研究叢書」ノ第三冊トシテ、東北帝國大學農科大學内かめら會コリ發行セラル、本書著作ノ由來ハ高岡博士及著者ノ序文ニ詳ナレバ、一切之ヲ省略シ、直ニ本書ニ付キ數ヶ條ノ妄評ヲ試ミテ、大方ノ教ヲ請ヘントス、是レ畜タ著者ノ遺志ニ背カサルノミナラス、學界ノ爲メ亦決シテ無用ノ勞ニアラズト思惟スレバナリ

本書ハ第一編ヲ序論トシ、緒言ノ外五章ヨリ成リ、第二編ヲ本論トシ、緒論ノ外三部十八章及附錄并結論ヨリ成レル四百餘頁ノ一大著作ニシテ青年學士ノ近業トシテハ寔ニ稀レニ見ルノ好著ナルベキハ余ノ決シテ疑ハサル所ナリ、高岡博

士カ「信淵翁ノ經濟學說ヲ能ク解剖シ日本經濟學史上ニ裨益スル所鮮少ナラズ」ト云ハレタルハ、固ヨリ過稱ノ言ニアラザルヲ知ルベシ、殊ニ其ノ所論ノ順序ハ先ツ最初ニ佐藤氏ノ家系ヨリ詳述シテ、所謂家學ノ源流ヲ明ニシ續キテ信淵其人ノ一生ヲ青年壯年及老年ノ三時代ニ區別シ、各々其ノ時代ニ於テ師事シ、又ハ往來シタル人々トノ關係ヲ述ベ、夫レヨリ信淵及其ノ祖先ノ著作等ヲ、々々掲載シテ、其ノ脱稿ノ年ト版本ノ有無ヲ示シ、次キニハ當時ノ時勢ト幕末學界ノ狀況トヲ詳ニシ、依テ以テ信淵ノ經濟思想ノ形成セラレタル根本ヲ説キテ、第一編ノ序論ヲ終リ、是レヨリ本論(第二編)ニ入ツテ、精細ニ信淵ノ學說ヲ解剖シ、第一部社會改良主義論ノ下ニ理想ノ國家及交易機關國有論ヲ評シ、第二部農政學說ノ下ニ農業國本論、日本農政史論、土地政策論、農業勞働政策論、農民教育論、農民租稅負擔論、組合制度論、米價調節策及治藩策ヲ評シ、第三部農學學說ノ下ニ地圖、氣候、土性、水利、耕種及畜産ヲ評シ、附錄ニ水產政策ヲ評シ

テ、最後ニ總括シタル結論ヲ述ヘタルハ、秩序整然トシテ頗フル學史ノ體裁ヲ得タルモノト云ハザル可ラズ

加之ナラズ本書ノ結論ヲ約言スレバ、著者ハ信淵ノ學說ヲ以テ「ふぬしおくらつと」ノ亞流トナサス、寧ロ「まーかんちりすと」及「かめらりすと」ニ酷似スルト云フノ意見ナルカ如シ、若果シテ然リトスレバ、余ハ此ノ說ニ向テ、必スシモ反對ノ意見ヲ有セサルノミナラズ、事實夫ノ「かめらりすと」殊ニせけんごるふ及ゆすち等ノ學說ノ如キハ、信淵ト大ニ其趣ヲ同フスル所アルヲ疑ハサルナリ、但余ハ信淵ヲ以テ著者ト同シク、重商主義及かめら主義ノ系統ニ屬スル者ナリト、斷言スルノ勇氣ナシト雖、兎ニ角彼カ學說ハ彼等ニ類似スルノ點多クシテ、勿論「ふぬしおくらつと」及あだむ、すみす派ノ如キ、自由放任主義ニ比較スレバ、甚タシキ懸隔アルコトヲ認メサルヲ得ス、而シテ著者カ所謂重商主義及かめら主義ニ屬スル特色ハ、獨リ信淵ノ學說ニ止マラス、我カ徳川時代經濟學說ノ特色ナリト結論

シタル一點ハ、就中最モ懸當ノ所論ナレバ、余ハ其ノ「重商主義」アル四字ヲ除外スルノ條件付ニテ、此ノ說ニ裏書スルコトヲ辭スル者ニアラサルナリ

然レトモ今進ンテ本書ノ内容ヲ詳カニ看察スル時ハ、其ノ所論ハ所々ニ矛盾アリ、誤解アリ、又誇張ノ言辭アリテ、學者ノ研究トシテ見ル可ラサル所頗フル多シ、故ニ茲ニ其ノ重モナルモノヲ、指摘スルコト左ノ如シ

サテ先ツ第一、着ニ本書中矛盾ヲ免カレザル一二ノ例證ヲ掲クレバ、一七頁ニ水野忠邦ガ信淵ノ經濟問答ヲ讀テ大ニ感服シ、更ラニ人ヲ遣ハシテ質問シタレバ、信淵ハ之ヲ光榮トナシ、直ニ其ノ答案ヲ筆記シテ、一封ノ冊子トシ、之ヲ復古法概言ト題シテ忠邦ニ贈リタル顛末ヲ記シ(本書ニハ復古法概言ヲ忠邦ニ贈リタル由記シアルモ之ハ著者ノ誤ニテ、實際贈ラザリシトハ、信淵自ラ經濟問答祕記ノ末文ニ明記セリ)タル所ニ「若シ彼(忠邦)ニシテ尙數年其ノ任ニアリシナラニハ、信淵ノ理想或ハ實行ニ附セラレシヤモ未

タ以テ圖リ知ル可ラズ」云々ト述ベテ、忠邦ノ退
 職ノ爲メニ信淵ノ政策（復古法トテ商業ノ私營
 ヲ禁シテ國家ノ專占トスルノ説）ノ實行セラレ
 ザリシヲ遺憾トシツツ、一四九頁ニ於テハ「斯ル
 商業廢止論モ之カ實行ニ際シテハ、蓋幾多ノ困
 難アリ、怒クハ不可行ノ問題ナリト云フ可シト
 論シタルハ、是レ明ニ矛盾ノ説ト云ハザル可ラ
 ズ、又一〇頁ニ於テハ福田博士カ日本經濟史
 論ニ於テ、徳川時代ハ外形ニ於テ封建ノ如クナ
 リシモ、其ノ實封建ニアラス、專制の警察國家時
 代ナリト述ヘラレタル説（此ノ説ハ慧眼ナル福
 田博士ニハ不似合ノ説トシテ余ノ常ニ反對スル
 所ナリ）ヲ踏襲シテ、徳川時代ハ封建國家ノ精神
 ヲ拔去リタル統一の中央集權時代ナリト明言シ
 ナカラ、一五三頁ニハ徳川ノ財政ヲ説キテ「封建
 國家ハ支出ノ大部分ハ軍事費ナリ」ト云ヒ、又一
 六五頁ニ於テハ「將軍諸侯ハ共ニ封地ヲ受ケ、更
 ニ自己ノ封地ヲ臣下ニ封スルコトヲ得ル所謂封
 建國家ナリキ」ト云ヒ、又二二六頁ニハ江戸時代
 ノ奢侈ヲ論シテ「徳川時代ヲ論スルモノハ、其封

建國家ナルヲ忘ル可ラズ、凡テノ政策ハ封建的
 軍事上ノ觀念ノ潛メルヲ忘ル可ラス」ト云ヒ、其
 他處々ニ封建國家、封建制度等ノ言辭ヲ以テ、徳
 川ノ制度及其時代ヲ言顯ハシツツアルハ、是レ
 又矛盾ノ大ナルモノニアラズヤ、然レトモ更ラ
 ニ是ヨリ甚タシキハ一一八頁乃至一二八頁ニ於
 テ、信淵ノ學說ト社會主義トノ關係ヲ對比論斷
 スルニ當リ、先ツ初メニ「此ニ於テカ彼（信淵）ハ
 之（商業ヲ指ス）カ國營ヲ主張スルモノニシテ、
 其精神ニ至リテハ、近世社會主義者カ資本主義
 的生產ノ弊ヲ認メ、生産機關ノ共有ヲ主張スル
 ト敢テ異ルコトナシ、即チ彼ノ理想國家ハ社會
 主義ト其ノ出發點ヲ同フスルモノナリト斷シテ
 可ナリ」ト述ヘ、夫レヨリいりりノ社會主義ノ定
 義ヲ掲ケ、本來社會主義ナルモノハ民主主義的
 ナラサル可ラサル事ヲ論シ來リ、更ラニ一轉シ
 テ信淵ノ説ハ社會主義ニアラス、國家社會主義
 ナリト斷定シ、同時ニさんしもん、かゝるまるく
 す、るゝそゝ、わぐなり、まいやゝナドヲカワル
 ガワル引用シテ國家社會主義ノ社會主義ニアラ

サル事ヲ立證シ、最後ニ「此(信淵ノ學說ヲ指ス)ヲ歐洲社會主義ニ比スレバ、ばペーふニ後ルルコト僅カニ二年、さん、しもんニ後ルルコト僅カニ七年、而シテふーりえニ先ツコト實ニ五年、るい、ぶらんニ先ツコト實ニ十六年ナリ、信淵ノ時代ニ於テ斯ル革命的論議ヲナス、當時ニアリテハ實ニ極メテ突飛ノ論議ナリシナル可シト雖モ彼死シテヨリ六十有餘年、世界ノ經濟學界ハ社會主義、社會改良主義ノ論ニ轟々タリ、社會政策ハ經濟學研究ノ一目的トナリシ現今ヨリ顧レバ假令科學的ナラズトスルモ、尙比較的空白分子ノ少キ此社會主義的思想カ、以上ノ社會主義者ト相前後シテ、我カ國ニ存在セルハ、頗ル趣味ノ深キモノナラズヤ」ト、是レ實ニ思想ノ混亂矛盾ヲ示セルモノニアラスシテ何ソヤ

次キニ本書ノ一大缺典トシテ指摘スベキハ、著者本書ノ主人公タル信淵ヲ、餘リ豪華ラキ人物トシテ吹聴センカ爲メニ、往々事實ヲ誇張シテ、架空若クハ附會ノ說ヲ立ツルカ如キ嫌ナキニアラサル事はレナリ、今其ノ一二ヲ例示スレバ、

五八頁ニ信淵ノ哲學思想ガ、復古神道ノ影響ヲ受ケタル事ヲ説キ「幕末古學ノ勃興ハ國民ノ自覺心ヲ喚起シ、尊王ノ念ヲ養フニ與リテ力アリシモノ、信淵カ其著字内混同祕策ニ於テ、皇都ヲ江戸ニ移シ東京トシ、其中央及地方ノ行政機關ヲ改革シ、封建ヲ廢シテ王政ノ古ニ復セントセシハ、復古神道ノ思想與テ力アリシヲ認メサル可ラズト云ヒ、又九二頁ニハ「信淵ノ理想ノ國家ハ統治權ヲ將軍ニ委任セル當時ノ組織ヲ改メテ、天皇ハ親ク統治ノ大權ヲ握ラレ、諸國ニ國司ヲ任シテ、行政ノ任ニ當ラシム」云々ト云ヒ、信淵ヲ以テ所謂王政復古ヲ首唱シタル勤王家ノ如ク認メタルハ、是レ明カニ誇張ノ言ト爲サザル可ラズ、而シテ夫ノ混同祕策中ニ「世界萬國ノ蒼生ヲ安スルハ最初ヨリ皇國ニ主タル者ノ要務タルコトヲ知ル」ト云ヒ、又「王都ハ天下ノ根本ナルヲ以テ形勝第一ノ地ヲ撰フベシ………王都ヲ建ツベキノ地ハ江戸ニ如クモノアルコトナシ」ト云フカ如キ、又其他屢々皇國皇都等ノ言語ヲ繰返ヘシアルハ事實ナルモ、是レハ尋常國學

者流ノ口吻エシテ、必スシモ徳川政府ヲ倒シ、王政ヲ鎌倉以前ノ状態ニ復古セシムベシト云フノ意味ニアラズ、混同祕策ニハ固ヨリ顯然トスクノ如キ言語ナキノミナラズ、陰ニ暗示的ノ言語ニ於テスラ、聊カモ左ル意味ノ存在セザル事ハ、讀者ノ明確ニ認ムル所ナラン、加之ナラス信淵ノ意見ハ王政復古トコロデナク、却テ徳川氏ノ權力ヲ鞏固ニシ、一方ニ於テ天皇ヲ尊重スルト同時ニ、他ノ一方ニ於テハ、徳川氏ヲシテ永ク朝政ノ實ヲ擧ゲシメンコトヲ企圖シタルモノニシテ、著者カ一一二頁乃至三頁ニ引用セル物價餘論簽書ノ一節ハ、現ニ此等ノ事實ヲ證明スルニ餘リアリト云フベシ、即チ皇族ヲ始メ奉リ、諸侯諸大名ノ領地内ニアル富豪巨商ハ、悉ク江戸ニ献上（徳川直轄ノ民ト爲サントノ意ナルベシ）セシメテ、江戸住居ヲ申付クル時ハ、關東漸々ニ充實シテ、其根本極メテ強ク、永ク西顧ノ患ナカルベシト論スルカ如キハ、宛モ徂徠カ「天下ノ諸大名皆々御家來ナレトモ、宮位ハ上方ヨリ繪旨位記ヲ被下コトナル故、下心ニハ禁裏ヲ

誠ノ君ト存ズル輩モ可有、當分只御威勢ニ恐テ、御家來ニ成タルト云迄ノコト杯トノ心根不失ハ、世ノ末ニ成タラン時、安心成難キ筋モ有ル也（政談）ト叫ンデ、畏レ多クモ皇室ヲ邪魔物扱ニシタルト、其ノ精神ニ於テハ格別ノ逕庭ナシト云フモ過言ニアラズ、畢竟信淵ノ激烈ナル國家主義ハ多クハ、幕府ノ爲メニ獻策シタルモノニシテ、彼自ラ管仲ヲ氣取り、齊桓ノ霸業ヲ立テシメントシタルニ外ナラサルハ、其ノ語氣ニ徴シテ蔽フ可ラザルノ事實ナラズヤ、是レ此ノ翁カ華山長英ノ徒ト往來シタルニ拘ハラズ、獨リ其ノ身ヲ全フシタル祕密ノ消息ヲ洩ラスモノニアラサル歟

著者ハ又本書ノ六八頁ニ於テ「彼ノ思想學說ニ洋學ノ影響ヲ受ケシハ言ヲ待タス、彼ノ洋學ノ思想ハ經濟政策ニ於テハ、航海貿易ノ獎勵及植民地政策ノ主張ニ現ハレ、農學ニ於テハ所謂家學ナル測量、氣候、土性、肥養等ノ形而下學ニ於テ現ハレ、……………製造工業ノ技術ハ悉ク西洋ノ新智識ナラサルハナシ」ト云ヒ、一四六頁ニハ

信淵ノ持論タル商業國營ハ、國家ノ體面ヲ汚スモノナリト云フノ非難アル事ヲ批評シ、此ノ非難ハ「王道ヲ尊ヒ霸道ヲ退ケシ儒學者ノ一派ヨリ受クシ非難ニシテ、之ニ對スル信淵ノ辯駁ハ、彼カ洋學者トシテ世界ノ大勢ニ通シタル結果ニシテ、其經濟思想ノ清新ノ氣ニ滿チ、保守退嬰、偏ニ因襲的思想ニ囚ハレタル儒學者ノ經濟論ニ比シテ、卓然トシテ地ヲ拔ケルヲ示スモノナリ」ト述べ、最後ノ四〇六頁ニ至リ、特ニ筆力ヲ強メテ「彼ハ洋學者トシテ西歐ノ思想ニ接觸シ、彼ノ經濟思想亦爲メニ感化ヲ受ケシコト大ナルヲ以テ、日本經濟學說モ亦彼ニ至リテ一味清新ノ氣ヲ輸入セルハ爭フ可ラサル所ナリトス、斯クシテ佐藤信淵ハ徳川時代經濟學界ノ最後ニ輝ケル學界ノ「巨星ナリキ」ト云フノ讚辭ヲ以テ本書ノ終結トナシタルハ、信淵在天ノ靈、果シテ如何ニ之ヲ照鑑スルカ、余ヲ以テ之ヲ見レバ信淵ノ學說少ナクトモ其ノ經濟學說カ、西洋思想ノ感化ニ因ツテ清新ノ氣ヲ添ヘタリト云フノ一點ニ至リテハ、著者ハ信淵ノ諸書ニ明白ナル所論

ヲ、故サラニ隱蔽シテ、全ク無實ノ推斷ヲ肯テスル者ニアラサルカノ惑ナクンバアラズ、現ニ著者ハ自ら其ノ主張ヲ確ムルニ當リ、苦辛慘憺トシテ各方面ヨリ種々ノ證據材料ヲ蒐集セント勉メタルノ形跡アルニ拘ハラズ、信淵ノ經濟思想ガ西洋ノ何人ノ、如何ナル思想ヨリ淵源シ、又如何ナル學說ノ感化ヲ蒙リタルカハ、更ラニ一言モ之ヲ明示スル事ナク、信淵ノアラユル著書ハ、全然反對ノ事實、例ヘバ談、西洋ノ事ニ及フ毎ニ、當時多數ノ國學者若クハ儒者ノ間ニ行ハレタル、一般ノ排外思想ヲ以テ充滿シ、夫ノ存華挫狄論(中華ヲ保全シテ夷狄ヲ排斥スベシト云フ意ナルベシ)及呑海聲基論ノ如キヲ始メトシ、著者カ屢々引用セル宇內混同祕策ニ於テモ、皆西洋人ヲ夷狄トシ、侏儒缺舌、衣冠詭異ナドト稱シテ痛ク之ヲ排斥シツツアルモ著者ハ此等ノ事實ヲ度外ニ措キテ顧ミサルノミナラス、三六九頁及三七〇頁ニ於テハ「徳川幕府ノ政策上、洋學ハ天文、地理、測量、砲術、醫學、本草、舍密等主トシテ形而下ノ諸科學ニ發達シ、形而上學ノ發

達見ル可キモノ少カリキ、由來農學ハ其基礎ヲ形而下學ニ置クモノナルヲ以テ、所謂佐藤家農學ハ洋學ノ影響ヲ受ケ、科學的色彩ヲ有セルコトハ論ヲ俟タス、……然レトモ栽培論ニ於テハ依然トシテ當時ノ經驗ニ止リ、植物學化學ヲ應用シテ改良セルノ跡ヲ見ルナシ、植物學化學上誤レル説モ少ナカラズ」ト論シ、尙ホ進ンデ信淵ノ社友タル宇田川榕庵ガ植物起原、舍密開宗等ヲ著ハシテ西洋説ヲ鼓吹シタルニ拘ハラズ、信淵ハ此等ノ新智識ヲ農業ニ應用セントスルノ意ナカリシ事ヲ遺憾トシ、著者ハ特ニ彼カ爲メニ之ヲ辯解シテ、罪ヲ洋學研究時代ノ幼稚ナリシニ歸シ去リタルハ、其論ノ立場トシテ然ラザルヲ得ザリシナルベキモ、兎ニ角西洋學說ノ感化ヲ最モ深く受ケタルナルベシト思ハルル形而下學ノ農學ニ於テスラ、猶ホ且ツ斯クノ如シ、著者カ發達ノ見ルベキモノ少ナカリシト稱スル、形而上學ノ經濟學ニ於テ、却テ西洋思想ノ大ナル感化ヲ受ケ、一味清新ノ氣ヲ輸入シタリト斷言スルハ、是レ將タ何ノ據ル所アリテ然リシ乎、

著者ニシテ既ニ斯クノ如ク斷言スル以上ハ、其ノ當然ノ責任トシテ、學者ヲ満足セシムベキ相當ノ證據ヲ舉ゲザル可ラザルナリ、信淵ハ自ラ其ノ著書ニ於テ、所謂家學ノ淵源ハ、我國神祖ノ垂統法ニ基キ、之ニ參スルニ大禹伊尹及管仲ノ經濟道ヲ以テシタル精粹ノ大法ナルコトヲ誇稱シ、夫ノ著者カ推斷スルカ如ク、西洋學說ヲ研究シタルノ形迹ハ、少シモ明言セザルノミナラス、其ノ著經濟要錄ニ於テハ「西洋ノ諳厄利亞、魯西亞等諸夷ノ如キハ、上下一致シテ國事ヲ經營セシニ因テ、今ニテハ世界無雙ノ富強國ト爲レリ、或ハ云フ彼夷狄等ハ、邪法ヲ以テ民ヲ誑カシ、頻リニ骨折セシ者ナリト、夫レ誑シテ其民ヲ使フ者スラ、一時功ヲ成スコトアリ、況ヤ至誠仁義ノ道ヲ以テ、國人ヲ教育スルニ於テオヤ、……我家ノ經濟學ハ、和漢神聖ノ經典ヨリ淘汰シタル精粹ニシテ、皆悉ク國家衰亡ノ病根ヲ除キ、萬民貧窮ノ苦痛ヲ去ルノ無上良藥ナリ」ト云ヒ、又物價餘論發書ニ於テハ伊尹ガ堯舜ノ道ヲ學ビ、輕重通侈、決塞開闢決ナルモノヲ行ツテ、四海ノ

困窮ヲ救済シタルヲ以テ、最上ノ經濟道トナシ、之ニ附記シテ「一說ニ云ク、西洋ノ中ニモ此法ニ似タル制度ノ國アリ、總テ其國實買交易ノ事ヲバ、國王ノ專業トシテ、自國ヨリ出ル物産モ、外國ヨリ來ル品物モ、一旦皆國王ノ有ト爲シテ、之ヲ帳面ニ記シ、然シテ後商賈ニ命シテ此ヲ賣捌カシメ、其抽稅ヲ別收ム、故ニ國富ミ兵強ク、國勢ノ衰微スルコト無ク、國中古來飢寒ニ困ム者有ルコトヲ聞カズト云フ、實ニ堯舜ノ良法ナルヲ、彼既ニ探知セリト謂フベシ」云々と、斯クノ如キ思想ヲ有スルモノガ、反對ニ西洋學說ノ感化ヲ受ケタリト云フニ至リテハ、豈奇怪ノ甚タシキニアラズヤ、況ヤ當時信淵ノ學ヒタル和蘭語ヲ以テ記述シタル經濟學書ハ其ノ本國ニ於テスラ甚ダ稀少ニシテ近年め一ず、び一るそん等ノ輩出スルマテハ、經濟學說ヲ以テ目スベキモノ殆ンド之レナカリシハ、學史ノ明言スル所ナルニ於テオヤ、又著者ハ信淵カ西洋思想ノ感化ヲ受ケタル事項トシテ、特ニ航海貿易ノ獎勵及植民政策ノ主張ヲ擧ケタルモ(六八頁)是レトテ

少シモ、其ノ證據ヲ示シタルニアラス、唯々僅カ一行ノ中ニ「彼ノ洋學ノ思想ハ經濟政策ニ於テハ、航海貿易ノ獎勵及植民政策ノ主張ニ現ハレ」ノ三十五字ヲ以テ、輕々ニ之ヲ斷定シ、其他何クニモ明確ナル證據ニ依テ、之ヲ詳論スル事ヲ爲サザルハ、余ノ甚タ遺憾トスル所ナリ、願フニ信淵カ航海貿易ノ必要ヲ説キ、領土擴張ノ急務ヲ絶叫シタルハ、其ノ說必スシモ新規ナラズ、我國學者ノ多クガ古來頻リニ唱道シタル所ニシテ、其ノ實ハ學界ニ於ケル一種ノ遺産ノ如ク、代々傳ヘ來リシ所ナルモ、兎ニ角此ノ問題ニ關スル信淵ノ主張ハ、最モ詳明適切ニシテ、彼カ學說トシテハ、大ニ之ヲ評論紹介スルノ價値アリト云ハサル可ラズ、若シ著者ニシテ專ラ此ノ問題ニ重キヲ置キ、信淵ノアラユル著書ヲ精讀スルト同時ニ、其ノ以前ニ於ケル和學者及支那學者等ガ、此ノ問題ニ關シ、如何ナル意見ヲ有シタルカヲ審カニシダランニハ、現ニ著者カ引用スルガ如キ、無用ノ材料ヲ各方面ヨリ亂雜ニ蒐集スルノ勞ヲ取ラズトモ、最モ明晰ニ信淵ノ眞面目ヲ

描寫シテ、其ノ學界ニ貢獻シタル正當ノ地位ヲ指示スルコト難シト爲サザリシナラン、然ルニ惜イ哉著者ハ事此ニ出デズシテ、強ヒテ信淵ノ思想ヲ、西洋のナラシメントシ、洋學者トシテ西洋ノ事情ニ精通シタル結果、西歐諸國ノ植民政策ニ傾倒シ「タルガ如ク吹撫セルハ(二三三頁)是レ實ニ附會ノ甚タシキモノト云フベシ、勿論信淵ハ和蘭ノ醫術、天文、地理、歴史及本草等ニ關スル少數ノ原書若クハ翻譯書ヲ閱讀シテ、多少西洋ノ知識ヲ有シタル事ハ疑ヒナク、又彼カ主張ノ或ル部分ガ、夫ノ「まーかんちりすど」及「かめらりすど」ノ意見ニ酷似シ居ルコトモ事實ナリト雖、是レハ著者ガ白ラ云ヘル如ク、徳川時代經濟學說ノ特色ナレバ、單ニ此等ノ事ヲ以テ、信淵ノ經濟學說ガ、西洋思想ノ感化ヲ受ケタリト速斷シタルハ、遺憾ナガラ著者ガ一方ニ於テ、信淵ノ學說ノ真相ヲ深く研究セザリシト、又他ノ一方ニ於テハ、信淵以外他ノ學者(殊ニ和蘭學ナドヲ爲サザリシ學者)ノ意見如何ヲ、比較研究スルコトヲ爲サザリシ故ナリト云ハサル可ラ

ズ、又著者ガ信淵ヲ帝國主義者トナシ、航海運送業獎勵ノ如キハ、此ノ思想ヨリ逆ル所ナリト論シタルハ(三二四頁)其ノ説、誠ニ是ナリト雖、然レトモ彼カ帝國主義ハ、帆足萬里ノ南洋經略論、若クハ山田方谷ノ山東略取策ノ如ク、粗暴ナル膨脹的武斷主義ニアラズトシテ(三二五頁)此ノ點ヨリ之ヲ稱贊シタルハ、是レ又何等ノ妄斷ゾヤ、信淵ノ思想カ最モ激烈ナル武斷的侵略主義ナルコトハ、宇內混同秘策、及吞海陸基論等ノ諸書ヲ一讀スレバ別ニ辯スル迄モナク、自ノ明白ノ事實ニシテ、彼レハ現ニ混同秘策ニ於テ「此ノ書ハ先ツ支那國ヲ取ルベキノ方略ヲ詳ニス」ト公言シ、此ノ目的ヲ達スルニハ、先ツ守備ノ薄弱ナル滿洲ヨリ着手シ、漸々進ンテ内地ヲ侵略シ、遂ニ支那全國ヲ統一シタル上ハ、西域、暹羅、印度等ノ國々ハ、我カ皇國ノ德ヲ慕ヒ威ヲ恐レ、稽顙匍匐シテ、臣僕タルニ至ルベシト論ジ(混同秘策)又軍艦大砲次第ニ多ク出來ルヲ待テ、遠洋ニ乗出シ、北ハ蝦夷諸島ヲ開キ、南ハ比利皮那ノ諸島ヲ經略シ、漸々かろりにせ呂宋、眠太腦等ヲ攻

取テ、皇國ノ屬州ト爲スベシ(香海肇基論)ト論シタルカ如キハ、是レ即チ信淵ノ説ノ眞面目ニシテ、其ノ著書ノ各部分ニ、屢々此等ノ説ヲ繰返ヘシツツアルニ、著者ハ猶之ヲ知ラサル乎、或ハ之ヲ以テ粗暴ニアラズトスル乎、膨脹的武斷主義ニアラズトスル乎、余ノ淺學ナル、萬里及方谷ガ、此レ以上ノ暴論ヲ陪ヘタルコトハ、未タ得テ知ラサル所ナリ、且又著者ハ信淵ノ帝國領土擴張説ヲ以テ、宛モ近年ニ於ケル歐米ノ帝國主義者ガ「吾人ノ同胞ニシテ野蠻ナル習慣、不當ナル制度ノ下ニ苦シメルモノヲ導キテ、文明ノ光ニ浴セシムルハ、吾人ノ義務ナリトノ理由ヲ標榜シテ、自國ノ勢力扶植ニ腐心スル」(三二六頁)ニ同シキモノナリトシ、信淵ノ思想ハ宛モ西洋思想ニ適合スルモノナリトシテ、大ニ之ヲ稱揚スルカ如シト雖トモ、元來我國ニ於テハ、斯クノ如キ思想ハ、決シテ珍ラシトスルニ足ラズ、現ニ徳川初代ノ大儒藤原惺窩ガ「小國ヲメジムフリヲシテ、大國ニシタカフ巧ヲメグラシ、後ニハ人ノ國ヲトリ、天下ヲ奪ハントスルハ、私ニアラズ、

是レ天理ノ自然、禮ニアタル儀則也」云々(續惺窩文集卷之一)ト述ヘタルハ、正シク同一ノ思想ニ出テタルモノト云ハサル可ラズ、故ニ信淵ヲ九泉ニ起シテ、近年ノ帝國主義ナルモノヲ聞カシメバ、彼レハ恐ラクハ、一驚ヲ喫シテ「我國惺窩先生以來ノ一大主義ナルヲ、狡猾ナル西洋人ハ早既ニ探知シタルカ」ト憤慨シタルヤ疑ヒナカラン、加之ナラズ著者ハ又信淵ヲ以テ自由貿易論者ナリト評セリ(三二八頁)吁是レ亦何ノ根據アリテ、斯クノ如ク推斷シタル乎、信淵ノ著書ノ多クニ於テ、彼ハ屢々「外國ニ通商シ互市交易ノ利潤ヲ收メテ、國內充實シ」云々(垂統祕錄、經濟要略、混同祕策等皆同一ノ言語ヲ繰返セリ)ノ語アリ、單ニ此ノ語ニ付キテ之ヲ速斷スレバ、彼ハ如何ニモ外國貿易ノ眞意義ヲ理解シ、對等主義、平等主義ニ依テ、廣ク通商貿易ヲ主張シタルモノノ如ク思ハルルカ故ニ、著者ハ或此等ノ語ニ依ツテ、彼ヲ自由貿易論者ト認メタルヤ知ル可ラサルモ、其實彼ガ外國云々ト云ヒ、通商云々ト云ヘルハ、皆其ノ場合場合ニ於テ、全ク之カ意

味ヲ異ニシ、例ヘバ一般ニ日本全國ニ付キテ論
スル時ハ、其ノ外國ナル語ハ、宛モ今日云ヘルカ
如ク、眞ノ外國ヲ意味シ、又其ノ通商ナル語ハ、
勿論國際間ノ通商ヲ意味シタルモ、例ヘバ秋田
藩、津藩、薩州藩、紀州藩、ナド藩々ニ付キテ論ス
ル時ハ、其ノ外國ト云ヒ、通商ト云フハ、多クハ
其ノ藩々ヨリ他藩ヲ指シテ云ヘルノ言ニシテ、
互市交易ナド稱スル事ハ、全ク藩ト藩トノ通商
ヲ述ヘタルニ過キザルコト往々ニシテ之レナキ
ニアラズ、而シテ又其ノ眞ノ國際間ニ於ケル通
商貿易ヲ意味スル場合ニ於テモ、亦廣ク歐米人
トマデ通商貿易スルノ意味ニアラズ、北ハ西伯
利東岸ノ未開地、南ハ清國、暹羅、安南、印度及南
洋諸島ニ對スル通商ヲ主張スルニ外ナラザル事
ハ、彼カ著書ヲ一讀スレバ、自ラ瞭然タラン、混
同祕策ニ駿河ノ竹細工ナドヲ盛ニ製造シテ、世
界萬國ニ輸出スベシト云ヘルガ如キハ、如何ニ
モ貿易ヲシキ所アルモ、彼カ所謂世界萬國トハ、
如上ノ未開國ヲ指示スルモノニシテ、西洋人即
チ魯國人若クハ英國人等ニ對スレバ、斷然トシ

テ之ヲ排斥シ、貿易通商ナドノ思想ハ、曾テ少シ
モ之ヲ懷カザリシノミナラズ、我カ沿岸ニ寄船
スレバ、直ニ打攘フベシト云フノ排外思想ヲ有
シ居タル事ハ、彼カ著書ニ於テ、常ニ明言スル所
ナリ、例ヘバ「奉皇松塘君封事」中ニハ「彼賊（
國人）ニ米ヲ遺ハシ候ハ、彼カ奸計ニ陥リ候次第
ニ御座候、……故ニ和親交易ヲ議ス、誠ニ亡國
之策ニ御座候」ト云ヒ、又「權貨法」ニ於テハ「
ぢりすハ強貪可惡ノ大賊ナリ、……萬一皇
國ニ來ルコト有バ、殿ク之ヲ打破テ、彼ノ夷狄ヲ
廢殺シ、以テ御國恩ニ報セント欲ス」ト云ヒ、又
「香海雜基論」ニハ「彼賊（西洋人）ハ人面獸心ナ
ルヲ以テ、寬仁ノミヲ施給ヒテ、或ハ不逮覆耳ノ
迅雷ヲ發シ、強胡ヲ赫恐セシムルノ雄略ヲ行ハ
サレバ、幾度モ船ヲ寄來テ、佞儂纏滯スルコトア
ラン、以後若シ來ルトキハ、殿シク此ヲ打攘テ、
神國ノ猛威ヲ示シ、蠻虜ヲシテ魂魄ヲ失ハシム
ベシ」ト云フカ如キノ文字アツテ斯クノ如キ排
外思想カ、信淵ノ著書ノ各部分ニ現ハレ居ル事
ハ、深ク研究ヲ要セスシテ、明白ナルベキニ、之

ヲ以テ故サラニ「自由貿易論者ナリ」トスルニ至
リテハ、事實ヲ枉クルモ亦甚タシキニアラズヤ、
畢竟信淵ノ通商交易論ハ真正ノ意味ニ於ケル通
商交易ニアラズ、彼カ混同秘策ニ云ヘル如ク、獸
肉ナドヲ食用トシ、馬ノ小便ノ如キモノヲ飲用
スル夷狄等ニ、皇國ノ良米ト美酒トヲ惠與シ、彼
等ヲ歡樂心酔セシメテ、其ノ領土ヲ奪フノ便ヲ
計ラントスルモノニシテ、約シテ之ヲ云ヘバ彼
カ通商交易ハ侵略主義ノ手段トスルニ外ナラザ
ルナリ

又著者ハ信淵カ大名フ二十萬石以下ト爲サント
云フノ説、及參觀ノ制度ヲ改正シ、其ノ隔年出府
ノ法ヲ止メテ、路程ノ遠近ニ從ヒ、一年乃至四年
毎ニ、一回宛出府ノ制ニ改ムベシト述ベタルコ
トヲ、大ニ讚嘆シ「是レ實質ニ於テ封建制度ノ破
壞ニシテ、中央集權ノ確立ナリトス、文政六年封
建制度ノ基礎、未タ動搖セザル時ニ當テ、此國家
組織ヲ論ズルハ、吾人信淵ノ勇氣ト識見ニ驚カ
ザルヲ得ズ」(九三頁)ト云フニ及ンデハ、余ハ著
者ガ何故ニ驚キタルカニ驚カザルヲ得ス、何ト

ナレバ大名ヲ二十萬石以下ニ制限セントスルノ
説ハ、著者ノ自ラ認ムルカ如ク、蕃山徂徠其他ノ
學者間ニ行ハレタル意見ニシテ、信淵ニ始リタ
ルニアラズ、又隔年ノ參觀制度ヲ改メントスル
ノ議モ、既ニ以前ヨリ學者間ニ唱ヘラレタル説
ニシテ、殊ニ中井竹山ノ如キハ、信淵ヨリ二十四
五年前ニ、其著「草茅危言」ニ於テ、明カニ信淵ト
全ク同一ノ意見ヲ主張シ居ルニアラズヤ、而シ
テ此ノ兩説ノ細目スラ、殆ント符節ヲ合スルカ
如ク、酷似スルノ點ヨリ之レヲ看察スレバ、後者
ノ説ハ或ハ前者ノ説ニ基キタルニアラザルカト
思ハルルモ、ソハ且ラク別問題トナシ、兎ニ角斯
クノ如ク、従前傳來ノ意見ヲ唱ヘタルヲ以テ、特
ニ大聲疾呼シテ、勇氣トカ識見トカニ、驚クト云
ヘルハ、是レ將タ何ニタル神經家ソヤ、又信淵カ
産業的行政機關ノ組織法トシテ、常ニ主張シツ
ツアル、三臺六府及三要六事ノ制ハ、著者之ヲ以
テ信淵ノ創始ニ出ツル、珍ラシキ説ノ如ク吹聴
スルモ、此レハ全然周官ト唐ノ六典トヲ燒直シ
タルモノニシテ、其ノ大體ノ主意ハ少シクモ異

ナル所ナキガ如シ、信淵ハ自ラ之ヲ辨疏シテ、周唐ノ分類法ヨリハ、更ラニ精密ニシテ、其ノ當ヲ得タルモノナリト誇言シテ居ルモ、職制ノ分類ハ、寧ロ枝葉ノ問題ニシテ、四民ヲ六民ニ分ルト、八民ニ分ルトハ、其ノ實質ニ於テ大ナル差別アルヲ見ズ、學說トシテ其ノ組織ヲ評論スルニ於テハ、信淵ノ理想ハ、全ク周唐ノ官制ニ淵源シタリト云フモ、決シテ過言ニアラザルナリ、然ルニ著者ハ一言ノ此ニ及ハズシテ、只管信淵ノ理想ノ卓拔ナルコトヲ吹聴スルハ、是レ豈本末源流ヲ詳ニスルノ明アリトナスベケン哉、加之ナラス著者ハ此ノ六府ノ說アルヲ以テ「信淵ノ理想國家ハ、第一節ニ述ヘタルガ如ク、君主專制國家ニシテ、天皇ハ統治ノ大權ヲ握ラレ、………司法行政ノ諸機關ハ、秩序整然トシテ、統一サルルモノニシテ、實ニ完全ナル中央集權的國家ナリ、統一の民族國家ナリ」ト斷言シタルハ、又甚タシキ誤解ナリト云フベシ、蓋著者ハ信淵ノ六府ノ制ヲ以テ、日本全國ヲ統一シタル、中央政府ニノミ行ハントシタルモノノ如ク信スルモ、信

淵ノ意ハ、必スシモ此ニアラズ、一方ニ雄飛スル大諸侯ニ於テハ、皆同シク此ノ六府ノ制ヲ實行センコトヲ企圖シタルモノニシテ、現ニ彼カ「經濟提要」ハ薩藩ノ爲メニ、其ノ經營策ヲ論シタルモノナルモ、之ニモ亦六府ノ制ヲ説キテ、其ノ實行ヲ勸メ「予モ亦老タリト雖モ法ヲ執テ事ニ從ハン」ナド述ヘ居ルノ事實アルニアラズヤ、然ラバ著者ガ國家組織又ハ產業制度トシテ、第二編ノ第一章ニ評論セル事ハ、中央集權的國家、又ハ統一の國家ナドノ觀念トハ、直接何等ノ關係アルニアラズ、幕府若クハ大藩ナレバ、何處ニテモ實行シ得ベシト認メ居タル事、論ヲ待ザルナリ、故ニ著者カ此ノ問題ヲ捕ヘテ、直ニ信淵ガ中央集權說ヲ唱ヘ、統一國家論ヲ主張シタリト推定シタルハ、見當違ヒノ甚タシキニアラズシテ何ンヤ、且又日本若クハ支那ノ學者、及政治家等ガ、周官ノ遺意ニ法リテ、古來往々學說上又ハ實際上ニ養老、保育、救濟其他アラユル社會政策メキタル制度ノ必要ヲ説キ、又ハ之ヲ實行シツツアリタル事ハ、東洋ノ社會經濟制度ニ着眼ス

ル者ノ、皆能ク知了スル所ニシテ、信淵ノ此點ニ關スル學說ハ畢竟其ノ一般思想ヲ代表シタルモノニ過ザルモ、著者ハ之ヲ以テ大ニ信淵ヲ讚嘆シ「此等ノ說(廣濟館、慈育館、遊兒儼、療病館等ノ設備ヲ主張シタル事)ハ嶄然トシテ、當時ノ學者ノ頭角ヲ拔クモノ、實ニ卓見ト稱ス可シ」ト云ヘルカ如キハ、皆悉ク誇張ノ言ニシテ、事實ハ眞ニ遼東ノ豕タルヲ免カレズ、蓋著者ハ未タ多ク東洋ニ於ケル他ノ學者ノ著書ヲ閱讀スルノ暇ナカリシ乎、將タ又故ラニ己ガ崇拜スルモノノ爲メニ所謂諛墓ノ讚辭ヲ呈シタルモノナル乎、何レニシテモ學者カ其ノ研究事項ヲ公ニスルノ道ニアラザル事ト知ルベシ

本書中農業ニ關スル科學上ノ批評ハ、吾人其ノ當否ヲ審ニセズト雖、信淵ノ農業ハ多クハ支那ノ「齊民要術」ニ基キタルモノニシテ、其ノ彼此ノ關係ハ、信淵ヨリ百數十年前ニ現ハレタル、宮崎安貞ノ農業ガ、同シク支那ノ「農政全書」ニ基キタルニ異ナラザルガ如シ、然ルニ信淵ハ其ノ著「草木六部耕種法」ニ於ケル自分ノ學說ヲ、宮

崎安貞ノ「農業全書」ニ比シ、彼カ分類ヲ不完全ナリトシテ、之ヲ指摘シツツ、自分ノ學說ノ優レルコトヲ誇言シ居ルモ(經濟要錄)著者ハ此ノ點ニ於テ、更ラニ精細ノ研究ヲ遂ケズ、信淵ノ自畫自贊ヲ信用シテ、杜撰ノ比較論ヲ爲シ、信淵ノ分類法ヲ以テ「安貞ノ分類ニ比スレバ、更ニ統一的ニシテ理論上ノ根據ヲ有ス」トシ、又「農業全書ニ比スレバ其ノ氣候、土壤、肥料上ノ知識ハ、遙ニ科學的」ニ云々ト稱シ、遂ニ此ノ「耕種法」ヲ以テ「農業全書ト共ニ本邦組織的栽培法ノ二大名著ナリ」ト批評シタルモ、著者ハ曾テ農業全書ヲ讀ミタル事ナク、惟タ諛然ト信淵ノ著者ニ據リ、信淵自身ノ說ニ基キテ立論シタルノ形迹アルハ(著者ガ農業全書ヲ讀サリシ證據ハ信淵ガ經濟要錄ニ於テ、宮崎安貞ヲ山崎安貞ト誤リ居ルヲ、著者亦其ノ誤ヲ踏襲シテ、山崎安貞トナシ居ル事ニテ明ナリ)余ノ大ニ遺憾トスル所ナリ

之ヲ要スルニ、本書ハ信淵ノ著書ノ世上ニ現存スルモノヲ、博搜熟讀シテ、其ノ學說ノ特徴ヲ研究シ、彼此比較シテ其ノ價値ヲ秤量シタルモノ

ニアラズ、著者ハ其ノ腦裏ニ於テ、先ツ目的人物タル信淵ノ人格ヲ抽象シ、彼ヲ以テ非常ニ豪キ者トシ、又卓見家トナシ、始終常ニ此ノ想像ニ因ハレテ彼カ學說ヲ、其ノ實價以上ニ積ラントシ、却テ之カ爲メニ無用ノ材料ヲ蒐集シテ、冗長ノ文字ヲ臚列スルノ必要ヲ生シタルハ學者ノ態度トシテ返ス返スモ遺憾ノ極ミナリト云ハザル可ラズ、著者カ信淵ヲ以テ「ふゐしおくらつと」ヨリハ寧ロ「まーかんちりす」と若クハ「かめらりす」とニ近シト云フノ一點ヲ本書ノ主眼トナシ、更ラニ進ンテ充分ニ其ノ異同ヲ辨シテ、信淵ノ學界ニ於ケルノ地位ヲ明ニスルカ、若クハ又（余ノ希望ヲ述フレバ）彼カ「爭鬪ハ活物ノ己カ欲スル所ヲ逞フセンコトヲ來ルノ業ニシテ、血氣アル者ノ無キコト能ハサル所ナリ」ト云ヒ（吞海驛基論）、又「自國ノ守リヲ強クスルニハ、他國ヲ攻取ルコトヲ專務ト爲サザレバ、全カラザルコトヲ察シ、船ヲ海外ニ出シテ、他國ヲ吞併スルノ方略ヲ論定シ」云々（同上）ト、云ヘルガ如キノ眞意ヲ了解シテ、彼カ主張ノ要點ハ、夫ノと

らいちつけ又ハべるんはるち等ノ意見ト、殆ント其ノ軌轍ヲ同クスル事ヲ、對比論評シタランニハ、却テ大ニ趣味アルノ文字トナリ、信淵其人ノ眞面目ヲ紙上ニ躍如タラシムル事ヲ得タリシナラン然ルニ今彼ヲ目シテ、王政復古論者トシ、自由貿易論者トシ、若クハ又單ニ植民政策論者ト爲ス、是レ信淵ヲ死ス者ナリ、彼ヲ活カス者ニアラサルナリ、信淵ハ寧ロ勇壯ナル世界併呑論者ナリ、激烈ナル侵略主義ノ鼓吹者ナリ、彼カ眞面目ヲ描キテ、其ノ意見ヲ紹介セントスル者ハ、須ラク此ノ精神ヲ以テ筆ヲ執ラサル可ラサルナリ、今ヲ距ル一三二十年前、とらいちつけガ伯林大學ニ於テ講演セル政治學說ノ筆記ヲ一讀スレバ、往々信淵ノ學說ヲ偷ミタルカト思ハル程、酷似シタル言辭ナキニアラズ、余ハ著者カ此ノ點ニ於テ、信淵ヲ我國ノ誇リト爲サザリシヲ憾ミトスルノミ。